

令和7年度 外務大臣表彰（1）

受賞者の紹介

外務大臣表彰は、日本との友好親善関係の増進に特に顕著な功績のあった個人および団体について、その功績を称えるものです。令和7年度は東京本部の推薦により、平野久美子氏（ノンフィクション作家）が、台北事務所の推薦により林成蔚氏（元北海道大学公共政策大学院教授）が受賞されました。ご功績に対し、衷心より敬意と感謝を表します。本号では、東京本部推薦の1名をご紹介します。

平野久美子 ノンフィクション作家

功績概要：日本と台湾との相互理解の促進

平成5年より台湾を積極的に作品に取り上げる中で、明治4年に南東部で起きた琉球民遭難殺害事件の和解交流に平成26年から尽力。琉球島民等54名がパイワン族に殺害された同事件の加害



者・被害者双方の末裔の交流において、屏東県牡丹郷の記念公園内の事件説明板の修正に協力してわだかまりを解消。また未来志向の立場から記念碑の移設等を長年に亘り支援、令和6年には宮古島市と屏東県牡丹郷との友好協定締結に至った。また、本件や地下ダム二峰圳の設計者鳥居信平、戦前生まれの日本語世代にかかる書籍を日台双方で発行し反響を得る等、相互理解と友好親善に貢献した。

受賞のご挨拶

今年の9月5日に外務省公館で岩屋毅大臣から表彰状を拝受した際、今まで私を支えて下さった日台双方の多くの方々のご厚意とご協力に、思いを馳せずにはられませんでした。

私が台湾に強い興味を抱いたきっかけのひとつは1990年代初頭に雑誌の取材で訪れた台南で、多くの「日本語世代」（註・戦前の台湾で日本人として生まれ教育を受けた人々。多桑＝とおさん世代とも言う）と遭遇したことです。彼等は初めて出会った私に、公学校でお世話になった恩師の思い出や志願兵としての苦労話、日本の敗戦によって体制が変わった社会への違和感、言葉の違いから生まれる親子の断絶などを、まるでダムの水を放出するような勢いで一気に語ってくれました。それは同じ戦争体験をした自分の父親世代が、決して吐露しなかったあの時代へのノスタルジアであり、道徳観念が緩んでしまった戦後日本社会のふがいなさを嘆く言葉でもありました。その後も彼等の問わず語りを記録するたびに、恩讐を越えて”桜の教え“を胸に秘め、愛憎ないまぜの感

情を日本に対して抱く彼等から、どれだけ多くのことを教わったでしょう。”多桑さん“たちのお陰でさらに大正、明治と時代を遡り、1874（明治7）年の、日本が台湾を統治する伏線ともなった牡丹社事件（註・1871年の琉球民遭難殺害事件と1874年の台湾出兵も含んでこう呼ばれる）にたどりついたのです。

ところでノンフィクション作品は、事前の準備から現場での取材まで、さまざまな関係者や専門家からのご協力なしには完成しません。証言や意見を集めそれを言葉に紡いで一文字ずつ刻印する作業は個人によるものですが、取材に応じて下さる方々との協働があってこそ、読者の評価も得られ思いもしなかったことが起きるように思われます。

1923（大正12）年にサステナブルな地下ダム『二峰圳』を台湾南部に完成させた水利技師鳥居信平の評伝を出版した後からは、「奇美文化基金会」董事長だった故許文龍氏のご厚意で、信平の胸像が出身地の静岡県袋井市とダムのある屏東県来義郷に設置され、それがご縁で防災協定を含む

相互交流が盛んになりました。また牡丹社事件の和解をテーマにした本を出版した時、台湾側から沖縄県宮古島市に寄贈された「愛と平和の像」が放置されているのは“もったいない”と文中で感想を添えたところ、宮古島市議会と教育委員会が動いて下さり、2023（令和6）年にカママ嶺公園への移設が完了。2024（令和7）年11月には日台協賛で慰霊祭が開かれ、牡丹社事件の被害者と加害者双方の末裔が改めて相互理解を誓い、さらには宮古島市と屏東県牡丹郷との間に友好条約が締結されました。さらに、台湾が製作した牡丹社事件の映画上映も宮古島市民の尽力で実現。このように交流が広がっていったのは日台双方の努力と熱意に他なりません。

今後も楽しくなごやかに汗を流し、次世代へ日台のかけがえのない絆をバトンタッチできるよう、台湾が誇る多様性と先進性を伝えられるよう、そして、すでに“人生を卒業なさった”日本語世代の方々への感謝を忘れぬよう努めて参りたいと存じます。